

シリーズ 日韓交流の歴史

朝鮮王朝の親日外交官「李芸」

寄稿 永留 久恵

二李芸と対馬 和田浦
李芸の功績を詳しく記載した正確な史料として『朝鮮王朝実録』の世宗王二十七年、和暦文安二年に、「同知中枢院事李芸卒」としてその死去に続いて生前の功績を載せた条がある。

李芸が始めて日本に遣されたのは一四〇〇年（応永七年）、回礼使尹銘に随つて言岐まで使した時で、往路対馬に寄つた時は、島主靈鑑（貞茂の父）に会つたが、翌年復りに対馬に至つた時は、島中乱れて靈鑑は居らず、乗船を盗まれて大変な事態に遭遇した。

「和田浦」に抑留されること一月、密かに船を準備して、逃れて還る計画を練つていたところ、朝鮮国より通信使朴仁貴が遣され、賊主と和解して翌年二月無事に帰国したとある。

この和田浦とはどこか、朝鮮使を抑留した者は誰なのか、について話を進める。現在、対馬に和田浦という集落はない。だが「和多浦」という地名はある。浅茅湾の島山と玉調の間の大きな入江で、大山嶽の南側の内海を指す。それは「万葉集」に、対馬の「浅茅浦」と詠まれた所である。

私がこの和多浦を調査したのは昭和四二年「浅茅湾沿岸遺跡調査」の予備調査をした時で、この無人の入江に多くの古代墳墓があることを確認した。農耕地のない浦に豪勢な石棺墓があることに驚いたが、これと

別に、中世の豪華な生活をした者が居た跡があつて、李朝初期の貿易陶磁が採集された。

その後「和田浦万戸」と呼ばれた海商兼倭寇の首領が居たことを知つたとき、これに違いないと確信した。万戸とは朝鮮語で、地方役人の官名だが、その万戸が居た浦は、土寄（尾崎）と和田浦だけで、万戸は賊首でもあつた。

そこで尹銘らを抑留したのは和田浦万戸ではないか、その目的は、朝鮮に何か重要な事（貿易特権）を要求するのに、その交渉の人質として抑留したのであるうと思われる。朝鮮国が通信使まで遣して、これと和解したというのは尋常のことではない。『実録』には、「尹等を殺そうとしている」とある

が、それは相手側と交渉を絡めた脅しである。このとき、李芸の態度が肝が据つていて誠実で、誰と付き合うのにも礼を失わず、交渉にも信頼を得て、相手からも「之が眞の朝鮮官人なり、殺してはならない」と言われたと書いている。外交官として最初の活動で、李芸はその並々ならぬ資質の片鱗を示したよう



高麗期から李朝初期の貿易陶磁が出土した辺り（美津島町和多浦西北部）

「朝鮮国通信使絵巻」実物展示のお知らせ

- 1.日時 平成17年8月2日(火)~8月28日(日)
午前9時から午後5時まで(ただし月曜日は休館です。)
- 2.会場 長崎県立対馬歴史民俗資料館 入館料無料



【問合せ先】対馬歴史民俗資料館 TEL52-3687